# KR&AC 交流試合が神戸におけるサッカー普及に果たした役割

## ―明治から大正期を中心に―

0880666D　坂本悠樹

キーワード：交流試合、KR&AC、神戸一中

1. 研究の背景と意義

福島（2011）によれば、日本におけるサッカーの普及は東京高等師範学校蹴球部OBによる師範学校への普及と、野球熱の興隆が進学成績に悪影響を及ぼすことを懸念し、かつパブリック・スクールと親和性のあった一部の中学校(進学校)への普及が主な経路であった。

この時期に、神戸にはKobe Regatta & Athletic Club(以下、KR&AC)の外国人が行う本場のサッカーに触れることのできる環境があった。本研究は、この KR&AC と神戸周辺の学徒との交流試合に着目する。その実態を解明し、神戸におけるサッカー普及過程の他の地域とは異なる特徴が明らかになれば、福島の指摘するサッカー普及の主な経路にとどまらない、地域的な特徴に依った多様な普及経路の存在を示すことができる。

2. 先行研究の検討

これまで日本や兵庫県を対象としたサッカーの普及に関する史的研究はいくつか行われてきた。

しかし、交流試合が行われることとなった経緯やその試合が神戸におけるサッカーの普及と発展に及ぼした影響について十分な考察が加えられたとは言えない。

3. 研究の目的と課題・方法

この研究では、明治後期から行われている、外国人スポーツクラブと神戸学徒との交流試合の実施の背景を調査分析し、その結果・評価を考察することで、日本における近代サッカーの普及過程の真相を究めていくことの一助とすることを目的としている。この目的を達成するため、以下3点の課題を設定する。1）当時の神戸周辺地域でのサッカー実施の実態を明らかにする。2）KR&AC という居留外国人スポーツクラブと神戸の学徒との交流試合が実施された背景、そしてその中から神戸一中との交流試合を取り上げ、実施の背景、結果および評価を明らかにする。3）先の2点の課題で明らかにしたことを踏まえ、KR&AC と神戸の学徒、主に神戸一中との交流試合が神戸におけるサッカーの普及、発展に果たした役割を考察する。

4. 主な研究史料

研究史料として、神戸一中の校友会誌『会誌』、神戸一中の蹴球部史『神戸一中蹴球史』、神戸一中、兵庫県立神戸高等学校の蹴球部、サッカー部史『ボールを蹴って50年』を用いる。

また、これらの一次的な史料に加え、KR&AC の 100 年史「Kobe Regatta and Athletic Club The FIRST HUNDRED YEARS by HAROLD S. WILLIAMS」を全訳した高木と長谷川による『神戸レガッタ&アスレティック・クラブ100年史 1870－1970』や棚田らによる論文を二次的な史料として用いた。

5. 本論

本論は2章構成であり、1章では交流試合の実施の背景を、続いて2章では交流試合の実態を明らかにする。

5.1　交流試合実施の背景

KR&AC の明治、大正期のサッカーの主な活動は以下の 3 点である。

・YC&AC とのインターポートマッチ
・外国船乗組員との試合
・神戸の学徒との交流試合

神戸一中は、1913（大正 2）年に野球部所属蹴球部が設立された。創部当初は、御影師範や KR&AC などに対戦相手が限られていた。大正 12 年度に神戸高商主催の大会において初優勝し、ここから 3 年間の黄金時代に入る。年間試合数が増加し、関西以外の学校との試合も増えてくる。

大正 15 年度以降、黄金時代が終わり、弱くなったとされているが、戦績で見るとさほど変わりはない。黄金時代を経験したことで、より高い目標、サッカーを目指すようになり、自らに対してより厳しい見方をするようになったとも考えられる。

5.2　交流試合の実態

交流試合実施の経緯に関しては、神戸一中は、学内だけの活動ではなかなか成長できないことから、学外へ相手を求め、レベルの高い試合を観戦し、参考にすることを望んでいた。そういった経緯から、当時東遊園地で活動しており、本場仕込みのレベルの高いサッカーを行っていた KR&AC に試合を申し込んだ。

神戸一中と KR&AC の関係については、大正 3 年度の対戦時には神戸一中にとって KR&AC は数少ない対戦相手であり、かつレベルが高く、全く敵わない相手であった。しかし、昭和 2 年度では自分たちよりも下のレベルの相手だとみなしていることが史料から確認できる。大正 3 年度の初対戦から昭和2年度の試合の間で、神戸一中と KR&AC の力関係、交流試合の持つ意味合いが逆転、変化したことがわかる。

6. 結論

神戸一中のサッカーは初期において KR&AC の洗練された技術に触れる事で大きな影響を受けた。KR&AC との交流試合を通して、彼等が実践する正式な本場のサッカーを常に意識し続けてきた。そして、その意識を持ちつつ、頭を使い、プレーや戦術を研究し、練習方法を考え工夫して取り組んだ。このことが基礎にあり、次第に神戸一中は自分たちのスタイルを確立し、強くなっていった。やがて日本人同士で試合が出来るようになり、より技術を磨くことのできる環境が整った。その環境でサッカーに取り組むことで、神戸一中は KR&AC に対し、引けを取らない実力を手にした。神戸一中の活動は KR&AC に多分に影響を受け、神戸一中出身の選手は上級校で活動することで、その学校のレベルを上げた。強い学校が増えることで、地域全体のレベルが上がり、その中で神戸一中はさらに鍛えられた。このようなサイクルが形成されたことから、KR&AC は神戸一中との交流試合を通して、神戸周辺地域のサッカーの普及と発展に貢献したと言える。

このように福島の指摘するサッカー普及の経路とは異なる、神戸独自の、居留外国人クラブを通しての受容を確認できた。しかし、これは神戸におけるサッカー普及の経路の一部であり、その全容についてはさらなる検討が必要である。昭和 2 年度の試合以降も、神戸一中が KR&AC との試合を行っているという記録はあり、そこでは神戸一中は負けている。よって力関係はその後も変化したと考えられるが、その時期の神戸一中と KR&AC の関係については本研究の対象外であるのでこれからの課題としたい。

（指導教員　秋元　忍）